
 学 会 記 事

 第5回新潟外科系領域
 バイオメディカル研究会

 日 時 平成6年6月17日(金)
 会 場 新潟グランドホテル
 3階 悠久の間

I. 一般演題

1) スカート付き ringed graft を用いた大動脈吻合部補強法の工夫

 諸 久永・高橋 善樹
 名村 理・斉藤 憲
 八木 伸夫・大関 一
 林 純一・江口 昭治 (新潟大学第二外科)

脆弱な大動脈壁への人工血管吻合時の種々の問題点を解決するために、新しい断端補強法を考案し、実験的に検討した。雑種成犬7頭に、左開胸で下行大動脈を露出し、左総頸動脈一大腿動脈間に一時バイパスを置き、作成した graft を下行大動脈に装着した。急性実験として、吻合部の耐圧試験と抗張力試験を行い、対象群とし、端々吻合例と比較した。慢性実験は移植1カ月後の組織像を検討した。その結果、スカート付き ringed graft は、通常吻合に比し、抗張力及び耐圧力に優れていた。また、組織像では ring 固定部の内膜・外膜断裂は認めなかった。

2) 神経因性膀胱患者に対する腸管利用膀胱拡大術

 小原 健司・郷 秀人
 波田野彰彦・金井 利雄
 武田 正之 (新潟大学泌尿器科)

萎縮膀胱の外科的治療である腸管利用膀胱拡大術について供覧した。膀胱容量は、機能的には排尿筋の過活動性により、器質的には排尿筋の線維化により減少する。各種保存療法によっても腎機能の悪化が進行し、また、尿失禁の改善のみられない症例が本手術の適応となる。低圧で適切な容量の膀胱を作ることが本手術の目的である。利用する腸管には、胃、回腸、上行結腸、S状結腸があるが、それぞれ一長一短あり、その優劣については一定の見解は得られていない。術式は、二枚貝状に膀胱を開くか、あるいは、膀胱三角部より頭側で部分切除し、

蠕動による圧上昇を防ぐため detubularized した腸管を膀胱に吻合する。術後、注意深い経過観察が必要であるが、本手術は、萎縮膀胱の治療として非常に有用である。

3) 膣欠損症に対する形成手術

 吉谷 徳夫・倉林 工
 倉田 仁・児玉 省二 (新潟大学)
 田中 憲一 (産科婦人科)

膣欠損症患者に対し性交を可能とすることにより、精神的負担をより軽減し円滑に社会生活を営ませることを目的として、種々の人工造膣術が考案されている。痕跡的な二分子宮を認め、膣を欠損する Rokitansky-Küster-Hauser 症候群は、本症の代表的疾患であり、当科においては1973年以降19症例に造膣術を施行してきた。手術術式は、S状結腸を用いた Ruge 法：5例(1973~1976)、遊離分層皮弁を用いた McIndoe 法：2例(1978~1980)、有茎外陰大腿皮弁を用いた Song 変法：7例(1987~1992)を行ってきたが、1992年以降は5例に骨盤腹膜を利用した Davidov 法を施行している。今回、Davidov 法について手術術式および治療成績を性交状況を含め報告する。

4) 小児における閉腹時皮膚縫合法と創瘢痕の検討

 松田由紀夫・岩淵 眞
 内山 昌則・内藤 真一
 内藤万砂文・八木 実
 金田 聡 (新潟大学小児外科)

小児症例57例72創で開腹創瘢痕の幅を検討した。縦切開創では横切開創より瘢痕は広がった。横切開創54創では、上腹部創は下腹部創に比べて瘢痕が広く、新生児では瘢痕の広がらない例が多かった。瘢痕の最大幅の平均値は結節縫合法、器械縫合法、皮内埋没縫合法では8.6mm (n=9)、5.2mm (n=20)、2.4mm (n=25)であり、真皮縫合を加えた創では1.3mm (n=13)であった。

同一横切開創でも側腹部では正中部に比べ瘢痕が広がりやすい。しかし、真皮縫合を加えた創では瘢痕の広がりが少なかった。

以上より皮膚縫合には真皮縫合を加えることが勧められる。